

註 3 鴨志田篤二「館出遺跡」 『勝田市史 考古資料編』 勝田市史編さん委員会 1979年

註 4 a 山内清男「下総上本郷貝塚」 『人類学雑誌』 第43巻第10号 1928年

b 山内清男「加曾利 E 式」 『日本先史土器図譜』 第IX輯 先史考古学会  
1940年 (1967年合冊再刊)

註 5 瓦吹堅・鴨志田篤二「茨城県縄文中期10段階区分図 (説明)」 『北関東を中心とする縄文中期の諸問題《資料》』 日本考古学協会 1981年

### (3) 有孔罎付土器について

当遺跡からは 3 点の有孔罎<sup>つば</sup>付土器が出土している。いずれも破片であるが、罎部に孔をもつタイプであり、伴出土器等から加曾利 E III 式期のものと考えられる。6 区の第55号住居跡出土の P 287 (第148図 6) は推定最大径約41cm、7 区の第27号住居跡の P 10 (第468図 4) は推定最大径47.5cmであり大形の個体と推定される。有孔罎付土器で、現在最大の容量を有する個体は山梨県小淵沢町中原遺跡出土のもので、推定46.5<sup>(1)</sup>l といわれている。この土器は樽形を呈し、胴部最大径を下半部にもち、器高59cmの大形土器で、当遺跡出土の 2 列とは器形も異なるために単純な比較はなし得ないが、かなり大形の個体である。一方、7 区の D3c<sub>6</sub>グリッド出土の P 176 (第662図11) は、小形で口径10.2cmである。罎部に孔が穿たれている。D3c<sub>6</sub>グリッドは第10号住居跡に近接する位置にあり、第10号住居跡に伴うものかもしれない。

これらの土器のうち 6 区の P 287 と 7 区の P 176 は無文であるが、P 10 は 2 本組の太めの沈線文によって大柄な渦巻状モチーフが描かれている。なお、他に 7 区の第14号住居跡からの出土土器第437図 1 は有孔罎付土器のミニチュアかと考えられるもので注目したい。

茨城県内出土の有孔罎付土器は、鹿島町木滝遺跡出土の完形品 (第659図 5) の外に、竜ヶ崎市赤松遺跡第103号土壇出土例、(第659図 3)、同遺跡第176号土壇出土例 (第659図 4) がある。共に罎部に孔をもつタイプで、両者ともに沈線による施文を有している。第103号土壇出土例は伴出土器が図示されておらず、第176号土壇出土例は伴出土器が破片だけのために時期が明確ではないが、加曾利 E I 式期の新しい段階と考えられる。他には小破片ながら谷和原村簡戸 A・B 遺跡第106号土壇出土例<sup>(4)</sup>があり、罎部に孔をもつものである。伴出土器は深鉢形土器の胴下半部片で、加曾利 E II～III 式期と考えられる。

なお、谷和原村大谷津 A 遺跡からは 3 点の注目すべき有孔罎付土器が出土している。第42号住居跡出土の有孔罎付土器は、ほぼ直立する口縁部片で器壁を貫通する孔を罎部の直上に穿っている。伴出の土器は阿玉台式土器の後半から末葉にかけての時期のものと推定され、県内では最古の例と考えられる。また、第60号住居跡出土の有孔罎付土器は、小把手と隆線によるモチーフを有するもので、罎部に孔を有している。伴出土器は強く内湾する深鉢形土器の口縁部片で、沈線

による曲線的磨消帯を描き、区画外には縄文が充填されている。加曽利EⅢ式期の終末ないしはEⅣ式期の古い段階と考えられる。いずれにしても本県においては最新の有孔鏝付土器と考えられる。もう1点の例は後者に類似する小破片で、鏝部に孔を有している。更にこの他にこの大谷津A遺跡からは有脚の底部片が2点出土している。有脚の底部は有孔鏝付土器に付属する例もあり、注意したい遺物である。

その他は記述だけであるが、鹿島町田野辺貝塚・同町塩釜遺跡に報告例がみられる。

以上の他に有孔ではないが、鏝付土器(第659図6)が前記の簡戸A・B遺跡第418号土壙から出土している。本例は伴出土器から加曽利EⅢ式期のものと考えられ、有孔鏝付土器の変遷において終末期の1つの様相を示す資料として重要なものである。

有孔鏝付土器については、藤森栄一氏の注目以来、武藤雄六氏、江坂輝弥氏、渡辺誠氏、山内清男氏、中村五郎氏らが論及し、定義・時期的変遷・分布・用途・社会的背景などについて諸見解が述べられているが、現段階では長沢宏昌氏の研究が最もまとまっていると思われる。

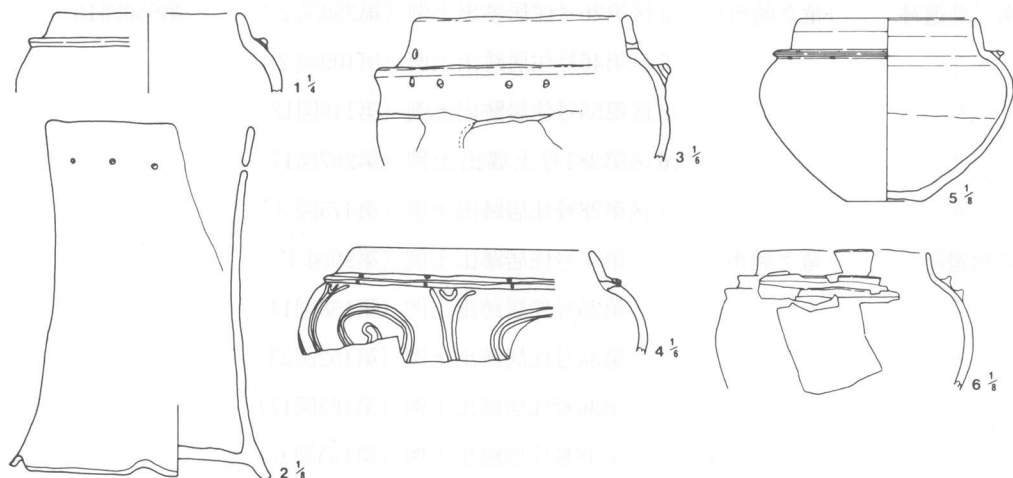
まず、分布に関して述べると、1980年現在では茨城県は分布の空白地域であったが、1984年の段階では鹿島町木滝遺跡に出土例がみられた。その後、上記の各遺跡出土例が報告されたが、この中で注目すべきものは、大谷津A遺跡42号住居跡出土の資料である。長沢氏が阿玉台式土器圈内においては有孔鏝付土器の分布は見られないとした地域の出土であったからである。しかし、谷和原村は茨城県の南西端近くに位置し、阿玉台式土器圏に属しながらも勝坂式土器との交流が著しかった地域と考えられ、本有孔鏝付土器や有脚の底部片の出土も勝坂式文化に伴うものと考えた方が妥当かと思われる。本来の阿玉台式土器の型式組成には含まれていなかった器種とするのが至当と思われる。

次に時期的変遷については、長沢氏案が現状では最も適切なものと考えられる。本県ではようやく時期的変遷に関して考察できる資料が出はじめたにすぎない。

用途については、酒造具説・太鼓説・澱粉質食糧の保存容器説・種子壺説・煮沸用具説が唱えられ、酒造具説が有力な現況であるが、酒造具説にも弱点がある。酒造りには、有孔鏝付土器にとって無くてはならぬ鏝も孔も、ほとんど役に立っていないという点である。これは酒造実験の結果から判明したことで、鏝や孔がなくとも、通常の土器(壺形・鉢形)でも酒造りは可能である。これでは何故に有孔で鏝付である必要があるのか説明がつかないということになる。用途の確定についてはまだまだ検討の余地がありそうである。

なお、最後に蛇足ながら桜村下広岡遺跡第12号土壙出土の土器(第659図2)について紹介しておきたい。本土器は推定口径21.9cm、器高38.9cmの筒状を呈する特異な土器で、無文で有脚状の底部を有し、口縁部に16個の孔が器壁を貫通して穿たれている。もし鏝が存在すれば有孔鏝付土器といえる形状を呈している。

- 註1 長沢宏昌『縄文時代の酒道具 有孔罎付土器展』 山梨県立考古博物館 1984年
- 註2 田口崇 「(伝) 木滝横穴古墳(横穴) 出土土器」 『文化財だより』第7号 鹿島町文化財愛護協会 1979年
- 註3 川井正一『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書4——赤松遺跡——』茨城県教育財団 1980年
- 註4 佐藤正好『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A遺跡 筒戸B遺跡——遺構・遺物編(上)——』 茨城県教育財団 1984年
- 註5 鈴木美治『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡(上)(下)』 茨城県教育財団 1985年
- 註6 長野県上田市無量寺遺跡出土例・福島県二本松市原瀬上原遺跡出土例・山梨県塩山市安道寺遺跡出土例・同県勝沼町釈迦堂遺跡群三口神平地区出土例に類例がある。
- 註7 海老原幸『鹿島町史』第一巻 鹿島町 1972年
- 註8 藤森栄一他「中期縄文土器の貯蔵形態について」 『考古学手帖』20 1963年
- 註9 武藤雄六「有孔罎付土器の再検討 一八ヶ岳南麓地方の基礎資料一」 『信濃』第22巻第7号 1970年
- 註10 江坂輝弥「新しい生産方式への発展」 『日本文化の起源』 講談社 1967年
- 註11 a 渡辺誠「罎付有孔土器に関する文献解題的意義」『あるかいあ』5 1964年  
b 渡辺誠「勝坂式土器と亀ヶ岡式土器の様式構造——東北地方の罎付有孔土器を介して一」『信濃』第17巻第2号 1965年
- 註12 山内清男「縄文土器総論」『日本原始美術』1 講談社 1964年
- 註13 中村五郎「土製太鼓覚書」『物質文化』23 1974年



第659図 茨城県内出土有孔罎付土器

註14 長沢宏昌「有孔鐔付土器の研究」『長野県考古学会誌』35 1980年

註15 長沢宏昌「有孔鐔付土器とその用途実験」『甲斐路』52 1984年

註16 小河邦男『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 茨城県教育財団 1981年

#### (4) 器台形土器について

縄文時代中期に特徴的にみられる一器種として器台形土器・台形土器・器台などと呼称されている土器が存在する。当遺跡においても破片を含めて4点の器台形土器が出土している。中でも6区の第46号住居跡出土の土器は、脚部全面に縄文が施文されている特異なものである。

器台形土器について正面から取り組んで論じたものとしては、室伏徹氏と上川名昭氏の<sup>(1)</sup>論攷がある。他は報告書、あるいは概説書などで簡単に触れているものがみられる程度である。

そこで、本稿では室伏氏の説に従って、茨城県内を中心に若干の資料集成を行い、時期的変遷などについて記述してみたい。

器台形土器の名称について室伏徹氏は、弥生時代の以後の器台との混同を避けるために台形土器と呼んでいるが、器台形土器と称すれば、一応区別がつけられるものと考え、本稿では器台形土器と呼称した。

形態分類および各部の名称についても室伏氏は、A型（無脚のもの）・B型（有<sup>ゆうがく</sup>鐔のもの）・C型（無鐔のもの）に分類している。A型は、山梨県坂井遺跡・桂野遺跡などで見られるだけで出土例も少なく、室伏氏のいわれるようにB型の形態変化のひとつとして位置づけられる可能性が高い。茨城においてはA型の分布はなく、B型・C型の分布がみられる。

茨城県内出土の器台形土器は、次のとおりである。当遺跡6・7区出土例以外の図・番号は報告書所収の番号である。右端の図・番号は、挿図（第660図）の番号である。

1 南三島遺跡	（竜ヶ崎市）	2 区第26号住居跡出土例（第250図 <sup>(2)</sup> 2）	第660図10
2	〃	6 区第46号住居跡出土例（第109図2）	
3	〃	6 区第55号住居跡出土例（第148図12）	
4	〃	6 区第281号土壇出土例（第267図17）	
5	〃	7 区第28号住居跡出土例（第475図3）	
6 赤松遺跡	（竜ヶ崎市）	第4号住居跡出土例（第90図 <sup>(3)</sup> 4）	
7	〃	第25号住居跡出土例（第138図14）	
8	〃	第34号住居跡出土例（第152図23）	
9	〃	第36号住居跡出土例（第163図17）	
10	〃	第38号住居跡出土例（第165図6）	
11	〃	第179A号土壇出土例（第190図5）	